

イギリス労働者階級の自伝と独学の文化

松塚 俊三

(福岡大学人文学部歴史学科名誉教授)

昨年8月、日英教育学会第28回大会にて、「イギリスの労働者はなにをどのように学んだか——19・20世紀前半、学びの歴史性——」と題する講演の機会をいただいた。講演の要旨は比較教育社会史研究会叢書の一冊（松塚俊三・安原義仁編著『国家・教育・教師の戦略』昭和堂、2006）にすでに収められており、旧聞に属するが、その後、労働者の自伝研究はそれほど進捗しておらず、あえて講演をお引き受けした。内心忸怩たるものがあるが、上記の旧稿や当日の講演で触れることができなかったことを中心に改めて稿を起こしたい。以下、1. ポスト・モダンから「ポスト・ファクト」へ、2. イギリス労働者階級の自伝と独学の文化、3. 自伝に見る子供たちの学校経験、4. 文字世界と口承世界（声の文化）の順に、表題のテーマがどのような問題関心、研究領域と重なっていたのか、講演を補っておきたい。

1. ポスト・モダンから「ポスト・ファクト」へ

1980年代以降、あらゆる学問領域に大きな衝撃を与えたポスト・モダンについては、歴史学の分野でも「歴史認識論」の問題として盛んに議論された。翻訳を含めて、多くの紹介がなされてきた「歴史認識論」も今や下火になってきており、多くを語る必要はないのかもしれない。しかし、イギリス労働者階級の自伝に関する研究がポスト・モダンから「ポスト・ファクト」にいたる時代の変化のなかでどんな意味をもっていたのかについてはほとんど言及されたことがなく、いくらか説明が必要である。

ポスト・モダンは近代の学問が打ち立てた「科学性」「客観性」「合理性」に対する批判として登場し、歴史学によって立つ「事実」や歴史家の仕事そのものにも根本的な疑問を投げかけた。史料に基づいて客観的、科学的に証明されたはずの「事実」は言語の構築物であり、実在との間に厳密な対応関係はないと主張された。史料から「科学的」に裏付けられた「事実」は、史料を書き記した人間の先入観やその時代に支配的であった思考の様式、約束ごと（コード）によって取捨選択された「テキスト」にすぎず、主観的な記憶の域を出るものではなかった。「客観的な歴史学」なるものも、実際には言語の構築物、虚構、物語であって、フィクション＝文学に限りなく近づいた。歴史学の「言語論的転回」と総称されるこの潮流は言語や文化の相対的な自律性、現実に働きかける言語の能動的な役割を認めるということまでは容認できても、「言語、言説

の外に何も存在しない」といった極端な「言語決定論」となるとそうはいかなかった。

不可知論に近づくポスト・モダンの言語決定論的傾向については、当然のことながら反批判も提出された。ホロコーストは言うにおよばず、自然災害や日々経験する出来事を言語の構築物として片づけてしまうわけにはいかなかった。しかし、ポスト・モダンの歴史学批判は極端な言語決定論的な傾向を別にすれば、歴史学に新たな刺激を与えたことも確かである。ここでの私の問題関心である自伝研究と独学の文化からすると、その要点は二つあった。一つは文字世界の優位性、正当性に対する懐疑と口承世界＝声の文化への新たな注目である。もう一つは歴史家によって客体化されてきた者たちを「主体」として復権し、彼・彼女らの物語をよみがえらせようとする歴史学の最近の動向である。使い古され、手垢にまみれた「主体」なる言葉を新たな装いのもとに再び登場させることになった背景には、「主体」を特定の概念やグランド・セオリーに埋没させてきた従来の歴史学に対する批判とともに、最近の極端な「言語決定論」的な傾向に対する戸惑いや反発が少なからず影響していた。「主体の復権」「物語の復権」はかつて盛んに議論された「変革主体」や「階級闘争」「民衆運動・文化」とは距離を置き、あらためて個人の経験の重みと向き合おうとしている。とはいえ、個人の経験に目を凝らすミクロな視点から社会や時代の新しい全体像がどのように描き出されるかは、社会史研究（微視の歴史学）以来の難しい課題である（長谷川貴彦『現代歴史学への展望』岩波書店、2016。長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020）。

「科学性」「客観性」「合理性」の呪縛から解き放たれたとはいえ、歴史家たちは改めて主体のもつ「主観性」という古くて新しい難問と向き合わざるを得なかった。加えて、「ポスト・ファクト」に象徴される情報化社会の進展が問題をいっそう複雑なものしている。「事実」は言語の構築物どころか、今や恣意的な操作の対象、「虚偽（フェイク）の動員」でしかないとまで言われるようになった。「事実」よりも感情、情動が前面に押し出され、責任を伴わない個人的な感情の露出が蔓延し、言葉そのものへの不信感も増している。自伝や書簡、日記など「エゴ・ドキュメント」に基づく歴史研究もこうした状況から逃れることはできない。自伝や書簡ほど主観的なものはないが、その「主観性」は自伝作者が時代とどのように対話して自己形成をはかったかを語っており、歴史が生成する現場、もろもろの感情が渦巻く「声の文化」への入り口であった。「主体の復権」「物語の復権」は時代とともに変化する「感情」や「情動」の歴史性を問うことになった。

これに関連して注目されるのは、最近、翻訳された二冊の大著、セリーナ・トッド・近藤康裕訳『ザ・ピープル—イギリス労働者階級の盛衰—』みすず書房、2016（Selina Todd, *The People, The Rise and Fall of the Working Class*, 2014.）とL・ダヴィドフ、C・ホール、山口みどり・梅垣千尋・長谷川貴彦訳『家族の命運—イングランド中産階級の男と女 1780～1850—』名古屋大学出版会、2019（L. Davidoff and C. Hall, *Family Fortunes: Men and Women of the Middle Class 1780-1850*, 3rd edition, 2019）である。扱う時期と対象は違っているが、両著はともに時代を生き抜いた個人の経験の重みから社会の全体像に迫ろうとしており、ミクロな視点からする歴史学の新たな可能性を示唆している。『ザ・ピープル』は経済学者トマ・ピケティの『21世紀の資本』（2014年）の主題であるU字曲線（資本収益率と国民所得の成長率の格差）と二重写しになり、注目

された。期せずして、トッドはピケティのU字曲線を労働者階級が経験した「盛衰」の物語から証明することになったからである。二つの大戦と福祉国家体制によって資本の収益率と国民所得の成長率との格差が緩和され、労働者階級は19世紀的な「貧民」から脱して「ピープル」になったが、サッチャー内閣の登場を機に再び窮地に追い込まれ、今度は人口のたった1パーセントが世界の富の半分を所有する、すさまじいまでの格差社会にあえぐ「ピープル」になった。トッドは諸個人の人生、生活を通して、20世紀初頭から現在にいたるイギリス労働者階級の「大きな物語」を描きだした。一方、『家族の命運』はジェンダーを基軸に中産階級がどのように社会を再編、秩序化していったかを描いた。時代の困難に立ち向かった家族、男女の物語はそのまま中産階級の自己形成の物語であり、ジェンダーがミクロな視点から時代像に迫りうる歴史学の方法であることを示した。イギリス労働者階級の自伝と独学の文化というテーマもポスト・モダンとその後の動向を抜きにしては語れないテーマの一つである。

2. イギリス労働者階級の自伝と「独学」の文化

歴史家たちによって客体化されてきた者たちを「主体」として復権させることが重要であるとすれば、教育の歴史も例外ではない。教育は伝統的な教育制度史や思想史によってではなく、個人の学びの現場に立ち返って再検討されねばならなかった。講演では、旧稿で扱った自伝資料をもとに(1)中産階級の推奨する「有用知識」とは対照的な労働者の知的自立心と自由で創造的な解釈、(2)自己改良の文化であった労働者の「独学」とそれを支える彼らのネットワーク、(3)労働者の学校体験、(4)労働者教育協会(WEA)についてお話しした。

労働者の自伝研究を大きく進展させたのはJ・バーネットやD・ヴィンセントらの歴史家たちであった(D・ヴィンセント、川北稔・松浦京子訳『パンと知識と——19世紀イギリス労働者階級の自伝を読む——』岩波書店、1991、同、北本正章監訳『マスリテラシーの時代』新曜社、2011)。彼らの悉皆的な自伝調査は1989年に実を結び、『労働者の自伝リスト、注釈と解題』(*The Autobiography of the Working Class, An Annotated, Critical Biography*, 3vols, 1984-9)として出版された。1790年代から1945年にかけて出された未刊行資料を含む、およそ2400点に達する労働者の自伝リストは研究者に計り知れない便宜を与えた。自伝も相当数がマイクロフィルム化された(*The People's History: Working Class Autobiographies*)。その最大の研究成果はこれらの自伝の大半を読み込んで書かれたジョナサン・ローズの大著 *The Intellectual Life of the British Working Classes*, 2001.である。1600を超える註の数に象徴されるように、自伝からの引用文にあふれていた。十数年前に書いた私の旧稿もこれに依拠した。ローズは労働者の自伝に記された「知的営み」にかかわる主観的な記憶をテーマごとに整理し、労働者階級に共有されていた時代特有の言説の構造、思考の枠組みをよみがえらせようとした。扱われるテーマは、知的独立心の獲得、知識の共有、相互扶助、労働者の読書クラブ、自前の図書室と書物の蒐集、ウェールズの炭鉱夫と図書室設立運動、事実とフィクションの区別、少年・少女向けの読み物、学校体験、教師、体罰、スラム街、労働者教育協会、マルクス主義、保守主義、植民地経験、その他、多岐にわたった。労働者階級のおよそ20% (20世紀初頭) と推測される知的な労働者の自伝に記された出来事はイギリス近現

代史と重なるだけでなく、彼らの記憶が時代の支配的な言説や通念・通説といかに違っていたかを教えた。ローズが伝えたかったことの一つは時代固有の姿をとってあらわれる労働者階級の「独学」、自己改良の文化であった。

ローズの大著は学校教育という狭隘な範疇には収まりきらない「文化的識字」を明らかにした。「文化的識字」は初歩的な読み書き能力だけでなく、生きて行くのに欠かせない知恵や態度、文化の獲得にかかわることがらであり、そこに表れる苦闘に満ちた経験をも含む概念であった。学校教育制度が整っていない環境下にあっても、学ぼうとする者たちは自ら学校や図書館を立ち上げたし、自ら教師役を買って出ることも決してまれではなかった。デйм・スクールはその代表的な事例であった（松塚俊三『歴史のなかの教師——近代イギリスの国家と民衆文化——』山川出版、2001）。また、彼らは非国教会派の厳格な教義にあらがって精神の自由を求めたし、フィクション＝小説を危険なものとして排斥する時代の支配的な文化とも闘わねばならなかった。想像力を喚起する小説＝フィクションを危険なものとして退け、中産階級の推奨する「有用知識」の範囲内に労働者の知性を押しとどめようとする時代の支配的文化に対して、ホメロス、シェイクスピア、スイフト、ディケンズの作品を読みふけたチャーティストの指導者トマス・クーパーは次のように応じている。

「人間の精神にながしかのことを教える小説の力、人間の精神に働きかけるその魅力は一定の範囲にしか働かない政治的、功利主義的あるいは科学的な計算によっては説明されえない。その魅力の秘密はおそらく小説が人間のもつすべての力に働きかけるという事実にあるだろう」と。

時には、洋服仕立屋にして著名な急進主義者でもあったフランシス・プレイス（1771-1854）の自伝が語るように、多くの書物を持ち、読書に親しんでいるだけで、ジェントルマン階級の敵意にさらされることもあった。経済的、制度的条件が整っていないことだけが学ぼうとする者たち障害ではなかった。「学び」が歴史的な特徴を帯びるのは「学び」を困難なものにしていた障害の歴史的、社会的性質によるものである。19世紀の知的労働者が自らの精神的自立、自由をめざしただけでなく、知識の共有をはかろうとしたのも、協働することによって時代の困難を打破しようとした結果であった。ひとりで黙読することは「非友好的な態度」であり、彼らは読み聞かせ＝声の文化を通じて仲間の非識字者とも知識を共有しようとした。おびたしい数の相互改良協会、読書クラブ、自前の図書館が19世紀に生まれたが、これらは仕事の斡旋や葬儀、生活物資の供給にさいして相互扶助の役割を担ったフレンドリ・ソサイエティの教育版といって差し支えなかった。自主的な運営、独立財源、教師・生徒関係の否定、表現の自由、知識の共有めざした学習組織の伝統は1903年に設立された成人教育組織である労働者教育協会（WEA）に引き継がれていった。「独学」は労働者階級にとって、生存を維持すべく自己の改良に努め、相互に扶助することと密接な関係を保っていた。

自ら学ぼうとした者たちの意気込み、高揚感を伝えて余りある自伝の一節を紹介しよう。1850年生まれのチャールズ・ショウの伝記に出てくる読書クラブの一節は精神的自立、共に学ぼうと

する者たちの昂る気持ちを遺憾なく伝えている。

われわれはあの世と地上のすべての問題について、時には宇宙のはるかかなたの問題について議論するために集まった。この習慣はうぬぼれから生まれたことではない、率直で純粋な気持ちから生まれたものである。……小数点の計算が天かける高みからわれわれを混沌の淵に引きずりおろそうとも、想像力をもって天文学を論じることができた。われわれは自国の歴史について概観することすらおぼつかなくはなかつたけれども、統治政策、諸民族、諸教会の教義と制度を論じることができた。……帝国議会に出席する議員以上の誇りをもって、われわれは土曜の夜の集会に出かけた。われわれが最初に集まったときには、まるでその日の議論に国民の運命がかかってでもいるかのように、騒々しい活気とさまざまな関心がうず巻いていた。

このような感想を自伝に記したショウは学務委員会によって設立された初等教育学校が基礎的な知識を与えると同時に教育を魅力のないただのテストに替えてしまったと述べている。

3. 子供たちの学校体験

時代が下るにつれ、「独学」とともに自らの学校体験に触れる自伝も多くなる。ここでも、彼らの体験は多様であり、教育史の通説とはずいぶんと違っていた。19世紀の初等公教育はモニトリアル・システムに象徴されるように、機械的な丸暗記と身体の規律化＝体罰に特徴づけられることが多く、教育史研究もおおむね否定的に描いてきた。しかし、実際には学校と教師に満足し、感謝する者たちが大勢いた。1870年の初等教育法（フォスター法）の影響をまともに受けた世代444人に関する1960年代の調査によれば、下層労働者階級の三分の二は学校体験を肯定的に捉えており、約70%が教師に満足していたと言われる。1902年に生まれたランカシアの職布工エリザベス・ブラックバーンもその一人である。彼女は自らの学校体験を次のように回想している。

「わたしたちが受けた教育は経済状態に制約され、学ぶ楽しみを追究できるほどの余裕はなかった。しかし、13歳でコミュニケーション、読書、書き方の確かな基礎を身につけて卒業した私は買い物にもこまらないし、家計簿もつけられる。自分の賃金もちゃんと計算できるようになったし、文学への関心も育てられた。そして何より、学ぶことへの刺激を得た。学務委員会と熱心だった教師たちに感謝している」と。

自伝のなかには機械的で「うんざりするような丸暗記」に閉口しながらも、成人した後に、基礎的な識字能力を獲得できたことに感謝する者たちもいた。自伝をものにするような知的労働者であれば当然のことであるが、自伝など書き遣すことのない下層労働者であっても、デイル・スケールの事例が示すように、基礎的な識字能力の有用性は十分認識されていた。いつの時代にあ

っても、教育は自ら学ぼうとする者と熱心に教えようとする者がいれば十分だと思われるが、ここに、学ぶ者と教える者の信頼関係の重要性を窺わせる事例がある。1899年に生まれた、塗装工の娘ロッティ・バーカーは教師の思い出を次のように語っていた。

「私にとって学校生活の規則やこまごまとした作業も楽しいものでした。むしろ、週末と休日が嫌いでした。週末と休日はいらぬような家事仕事の繰り返しでしたし、幼い子供たちの面倒をみなければなりません。先生は大変に厳しい人でしたが、公平な心の持ち主でした。大半の子どもたちはひもじい思いをしていましたが、とりわけ私は歳のわりには豆のつるを支える支柱のように高く痩せこけていましたので、他の子どもたちよりも一層ひもじい思いをしているように思われました。先生は罰を与えると称して、私を職員室に呼びつけ、私を傍らに座らせると、机の上にあった自分のサンドイッチを食べるように命じました」。

労働者階級の自伝は初等教育につきまとう体罰についても、教育史の通説とは異なる興味深いエピソードを伝える。19世紀末から20世紀の初頭にかけて、教師の過度な体罰に反対する子供たちの学校ストライキが頻発したことはつとに知られているが、労働者階級の子どもと親たちは正当な理由のある体罰を容認していた（スティーブン・ハンフリーズ、山田潤他訳『大英帝国の子どもたち——聞き取りによる非行と抵抗の社会史——』柘植書房、1990）。1910年生まれウィリアム・キャンベルは「われわれはムチでたたかれることを悪いとは思っていない。学校が終わった後で居残りをさせ、何百行もの文章を書きとらせるような罰はいつそうちの悪い罰だと考えていた」と自伝のなかで述懐している。体罰に反対する共産党女性委員会のメンバーであった彼の母親は、息子に体罰に反対する生徒たちのデモンストレーションを組織させ、校長の前で「ムチは帝国主義の道具だ」と金切り声をあげさせたが、この母親は台所にムチをかけていたのである。明らかな悪さをした子供たちにとって、本当に恐ろしかったのは教師の体罰を上回る親の体罰だった。自分の弱さを隠すためにムチを使う教師、些細なことで過度な体罰を課す教師は男らしくなかった。体罰はstrict but justが彼らの原則であった。炭鉱夫に見られたように、学校でいじめられて泣いて帰ってくるような子供たちに周囲の大人がボクシングを教える、手荒な文化が背景にあった。

4. 文字世界と口承世界（声の文化）

自伝はこれまで知られなかったイギリス労働者階級の経験に光を当てる可能性をもっており、研究は緒についたばかりである。しかし、自伝は諸個人の記憶をたどり、歴史を再構成する重要な資料になるに違いないが、同時にさまざまな制約をもってしていることにも注意が必要である。自伝を書き遺した労働者は労働者階級のほんの一部であり、自伝の背後に控える、記録を遺さなかった者たちの経験とどうつながっているのか、たえず意識しなければならない難しい課題をかかえていた。自伝の作者自身の経験としても多くの問題を含んでいた。ポスト・モダンの歴史学批

判に立ち返って考えると、自伝ほど主観的な記憶（記録）はないと言えるからである。事実の取捨選択、誤認、自己の経験の美化、脚色、強調の仕方など、どれをとっても自伝ほど主観的かつ創造的なものはなかった。もとより、自伝は過去を回想しているようで、実際には書かれた時点の著者を映し出してもいた。しかし、すでに述べたように、この「主観性」こそは「感情」や「情動」の歴史性を考える重要な出発点であった。ここに浮上してくる、より本質的な問題は自伝を含む文字世界とそれを幾重にも取り囲んでいる大海のような口承世界（声の文化）との関係である。自伝は大海に落とされたしずくの一滴にすぎなかった。研究上、最も困難な問題はこのような声の文化のなかから経験がどのようにして文字化され、自己形成の物語が紡ぎだされたかである。19世紀から20世紀の前半にかけて大量に出現する労働者階級の『自伝』は、識字率の向上と依然として命脈を保つ豊かな声の文化、独学の文化とが往還する時代の中に生まれた過渡期の歴史的現象であったように思われる。自伝を書くという行為そのものはきわめて個人的なものであるが、そこに反映される中身は相互扶助に象徴される緊密な人間関係であり、濃密な声の文化であった。

文字世界が優位に立つようになった18世紀後半から19世紀にかけての時代は口承世界が衰退し、その豊かさが見失われていった時代であったと言われてきたが、ことはそれほど単純ではなかった。読む力と書く力を併せ持つという意味での識字の語義がOEDに登場するのは19世紀末のことであり、定着していくには相当な時間を要した。少なくとも18世紀以前にあっては、多くの人々にとって識字とは読めるようになることであって、書けるようになることではなかった。その何よりの証拠は18世紀以前の民衆は通常のローマン体よりは暦やバラッドによく使われるひげ文字（ブラック体）に親しんでおり、かつ読めたと言われる。ひげ文字が書くための文字でないことは一目瞭然であろう。書くことはできないが読める者たち（半識字者）が大勢いたのである。最近の研究が明らかにしているように、声の文化と文字世界は前者が後者に席を譲るといっほど単純ではなく、両世界はわれわれが想像する以上に長期にわたって共存しており、今も続いている（大門正克『語る歴史、聞く歴史』岩波新書、2017）。

18世紀の後半以降、大衆向けの印刷物が洪水のごとく大量に出回ったが、印刷物の内容・原文＝テキストは声を出して読まれることを前提につくられていた。この時代の印刷物は読み手が朗読しやすいように工夫されていただけでなく、聞く者にとっても内容がたちどころに理解され、他人に伝えやすいように、対話の形式や挿絵、韻を踏むなどの工夫がほどこされていた。読むという行為はさまざまな社会的結合関係やそこの習慣、空間のうちに記しづけられた人々の、つまりは「読者共同体」「解釈共同体」のなせる業であった。読書の社会史を牽引したフランスの歴史家R・シャルチエの言葉を借りれば、「多くの場合、文学テキストにせよそうでないにせよ、暗黙の前提になっていたテキストの読み方は声を出して読むことだったのであり、テキストの読み手は聴衆に読み聞かせる朗読者であった。そのように、目と同時に耳にも向けられていた作品は声によるパフォーマンスが求める固有の要求に書かれた文章を従わせるのに適した形式やまとめ方を持つことで、作品として機能した」のである。（R・シャルチエ、福井憲彦訳『読書の文化史』新曜社、1992）要するに、印刷物であるテキストは年齢や性別、職業はもとより、独自の慣習や儀礼、表象、方言（俗語）や隠語にあふれた地域社会の「読書共同体」に固有な解釈をもた

らすということである。

こうした声の文化の要請にこたえた印刷物の典型は、笑話、寓話、暦、行儀作法、占い、英雄譚、犯罪物、医療、宗教など多岐におよんだ民衆本（チャップブック）と言われる粗末な読み物である。これらの印刷物は声の文化の想像力豊かな会話を通してとらえ返され、改作、脚色され、再び文字世界に新たな素材を提供した。二つの世界は「読者共同体」を土台にして絶えず相互に還流、刺激しあう関係にあった。しかし、もっと大事なことは、声の文化のなかにあつて「経験」がどのように伝えられていたかである。話すという行為は、話し方や、声の調子、表情、身振り、手振り、さまざまな感情を伴っており、生身の人間の身体技法を抜きにしては語りえなかった。人間の五感、身体技法と密接不可分な話す行為のなかには、それでも伝えられない記憶も多かった。このことは現代にもあてはまる。悲惨な戦場を体験した兵士たちが自らの体験を語りたがらないのもそのためである。戦場を恐怖に包み込む轟音、硝煙の臭い、ジャングルを這いずり回る兵士にこびりつく泥の感触、死体や血の臭いをどう語ればよいのか、戸惑いを隠せないのも当然だろう。このような現実には東日本の大震災のように、今日の我々が知るところである。人間はだれしも語り難い、表現しきれない経験をもつ。かつて、W・J・オングは「書くことは記憶を破壊する」と述べたが、我々はだれしも、そう言わざるをえない現実＝実在のあることを知っている（W・J・オング、桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991）。また、そうであるが故に、我々は誠実な態度をもって書かなければならないとも言える。

それでは、声の文化の中にある人々の経験は聞き取りによって正確に再現できるだろうか。これにも大きな問題があった。大門正克の前掲書が指摘するように、聞き手がよほど注意しないと、話の中身を聞き手の一方的な関心に誘導し、予定された結論に流し込んでしまいかねないからである。その場合、話し手の感覚や感情、情念はそのまま身体に取り残されることになる。言語化しにくい感情、情念、情動に対して、社会史研究は「心性」という言葉を当てあがってきたが、最近ではさらに歩を進めて「感情の文化史」「感情の共同体」が提起されるようになった（伊藤剛史・後藤はる美編著『痛みと感情のイギリス史』東京外国語大学出版会、2017）。情報化社会と同時に「感情化社会」とまで言われるようになった今日、「主体の復権」「物語の復権」を掲げる歴史学の新たな潮流がどのような言葉を発するのか注視して行きたい。

●参考：この領域に関係する私の仕事

- 1 「学校をみずからのものに」竹内敬温・川北稔編『社会史への途』有斐閣、1995。
- 2 「教育の民衆文化誌」『民衆の文化誌』（講座英国文化の世紀 第4巻）研究社、1996。
- 3 「リテラシーから学校化社会へ」『世界史講座』第22巻、岩波書店、1998。
- 4 「おばさん学校とイギリス民衆文化論——読むことと書くことの間——」『九州歴史科学』第28号、2000。
- 5 『歴史のなかの教師——近代イギリスの国家と民衆文化——』山川出版、2001。
- 6 R・オールドリッチ、松塚俊三・安原義仁監訳『イギリスの教育』玉川大学出版部、2001。
- 7 「独学の文化——19～20世紀のイギリス労働者は何をどのように学んだか——」松塚俊三・安原義仁編著『国家・共同体・教師の戦略』昭和堂、2006。

- 8 「識字と読書」教育史学会『教育史研究の最前線』、2007。
- 9 「近代イギリスの国家と教育——公教育とは何か——」『日本の教育史学』第51集、2008。
- 10 「セクシュアル・リテラシー——戦間期のイギリス労働者階級と性——」松塚俊三・八嶽友宏編著『識字と読書の比較社会史』昭和堂、2009。
- 11 「ブリテンの教育文化史」井野瀬久美恵編著『イギリス文化史入門』昭和堂、2009。